

令和 6 年 1 月

佐栞真悠子 学位論文審査要旨

主 査 岩 田 正 明
副主査 梅 北 善 久
同 花 島 律 子

主論文

Neuropathological analysis of cognitive impairment in progressive supranuclear palsy

(進行性核上性麻痺における認知機能障害の神経病理学的検討)

(著者：佐栞真悠子、足立正、鈴木有紀、瀧川洋史、花島律子)

令和5年 Journal of the Neurological Sciences 451巻 120718

参考論文

1. An autopsy case of PARK2 due to a homozygous exon 2 deletion of *parkin* and associated with α -synucleinopathy

(α -シヌクレイノパチーを伴った*parkin*遺伝子exon2欠失ホモ接合体によるPARK2の1剖検例)

(著者：佐栞真悠子、足立正、吉田健太郎、足立芳樹、中野俊也、花島律子)

令和3年 Neuropathology 41巻 293頁～300頁

2. First Japanese autopsy case showing *LRRK2* mutation G2019S and TDP-43 proteinopathy

(*LRRK2* G2019S変異とTDP-43プロテインパチーを伴った日本人剖検例)

(著者：佐栞真悠子、足立正、鈴木有紀、吉田健太郎、福田弘毅、三浦弘資、足立芳樹、花島律子)

令和3年 Parkinsonism and Related Disorders 91巻 85頁～87頁

審査結果の要旨

本研究は、神経病理学的に進行性核上性麻痺の診断に至った10例の剖検脳を用いて、認知機能低下群と正常群の2群間での比較を行い、認知機能障害の責任病巣について検討したものである。その結果、認知機能低下群では脳全体の神経細胞内における総タウ量が多く、部位別では視床下核と内側視床におけるアストロサイト内のタウ蓄積量が多いことが判明した。なお、2群間でその他の老年性変化は同等であった。本論文の内容は、進行性核上性麻痺における認知機能障害の責任病巣として視床下核や内側視床の重要性を示唆するものであり、学術水準を高めたものと認める。